

原著論文

絵本を100冊読み、ノートを作成する意味に関する考察

Consideration about the meaning which reads 100 picture-books and creates a note

鈴木 正和

Masakazu Suzuki

キーワード:絵本教育、ノート作成、保育者養成、獲得された力、感動する体験

Keywords :Picture-book education/Note creation/Child-care worker training/
Acquired power/Impressed experience

1、「絵本100冊読みノート」の課題と取り組み

乳幼児が本を通して、お話の世界に出会う最初の契機として、幼稚園教諭や保育士等の保育者による絵本の読み聞かせが重要な位置を占めていることは周知のことである。まだ文字が読めない発達段階にある乳幼児は、最初は保育者が選んだ絵本を目にし、保育者が絵本を読む声を聞くことで、絵本の絵や言葉、お話の世界に導かれていくことになる。

そうしたことをふまえるならば、保育者と絵本の関わりは、乳幼児と本との出会いとその関係に対して、大きな影響力を持つことが指摘できる。しかし、保育の仕事に携わることを目標として、保育者の養成校に入学してきた学生たちは、必ずしも小学校に入学以降も持続して絵本を読み続けてきたわけではない。幼少期には、幼稚園や保育所で絵本を手に取り、絵本に親しんでいた人たちも、やがて小学校に入学し成長していくに従って、国語の教科書に掲載された物語や小説を学ぶようになり、活字を通しての物語や小説に親しむ人が出てくる一方で、絵本を読む機会からは多くの学生が遠ざかっているのが現状である。

四年制大学で学ぶ学生には、保育者になるまでの時間にまだ余裕があるが、二年制の短期大学や専門学校の保育者養成校で学ぶ学生には、たとえ授業で定番とされている絵本の紹介をしたり、読み聞かせの実践を行なう機会を用意したりしても、なかなか自主的に多くの絵本を読むことが叶わず、保育者になって後に、多くの絵本と接していくことになるのが現状であるようにも思われる。学生に絵本を読む機会を与え、絵本に関する知識や感性を磨かせるための工夫は、多くの保育者養成校でも試みられているとは思われるが、その一つの方法として、自らの勤務するA短期大学で実践している「絵本100冊読みノート」の課題の内容や目的について、まず始めに紹介したい。

「絵本100冊読みノート」(以下、「絵本ノート」とする)の課題は、筆者が勤務校に赴任した段階で、既に伝統的に「国語」を担当する教員によって引き継がれてきたものであり、長年、学生に課

されてきた課題でもあった。しかし、学科の特色ある授業のアピールポイントとして、パンフレット等でも宣伝されていたが、筆者は、学生に絵本を「100冊」読んでもらい、それについてノートにまとめることを課題として課す、という事柄以上の情報を得る機会はなかった。そのノートの内容に関しては、前任者からの引継ぎをしたわけではなく、筆者自らが改めてその内容を検討し、ノートに何を書かせれば学生にとって有意義で意味のある学びになるのかを考え直す必要があった。

体裁としては、五〇枚の大学ノートを用意してもらい、一ページに一冊の絵本の事柄を記入させることで、「100冊」分の絵本の記録がノートに記されることになる。大学ノートは市販のものでも構わないが、学内の書店にはすぐに「絵本ノート」と分かるような、一般的ではない色彩の表紙のノートを販売してもらっている。もちろん、着任時の初めからこの試みが上手く行っていたわけではなく、数年間の試行錯誤を経て、筆者が新たに認識を深め、修正していった事柄もある。

その一つの例を上げるならば、「絵本ノート」を課題として記録させ、それを提出させるまでの期間の問題があったことが指摘できる。筆者が赴任した当初は、「絵本ノート」の課題の作成と提出は、短大の一年次に開講されている「国語」(A短期大学では「国語表現法」)の半期の授業で提出することが慣例とされていた。つまりは、実質は四ヶ月程の期間で、学生は「100冊」の絵本を読むことを強いられ、ノートをまとめさせていたことになる。赴任した当初は、その課題の負担の大きさに気づかず、また入学する学生の学力の変動の問題もあったかもしれないが、課題の提出期限が迫ってくると、他の授業内で内職をする学生が目立つことが他の教員から指摘され、提出期限に間に合わず、授業の出席回数は足りているにも関わらず、「絵本ノート」の未提出が原因で単位を与えられず、二年次になってから再履修を強いられる学生も出てしまうことが認識されてきた。幸いにも、A短期大学で筆者が担当する科目は、一年次の前期に必修の「国語」に加えて、二年次の後期に必修の「言葉(保育内容)」(A短期大学では「言葉A」)も担当していたため、着任して数年後には、「絵本ノート」の課題の提出を一年次に「60冊」まで、二年次に「100冊」までとすることで、「絵本ノート」の作成の期間の幅を二年間に拡大し、少なからずの余裕を学生に持たせるように変更した。これは四ヶ月で「100冊」を読ませ、ノートを作成させていた時と比べれば、作成までの十分な時間を学生に与えたことになる。もちろん、初めて「絵本ノート」を作成する学生にとっては、一年次の四ヶ月程の間に「60冊」の絵本を読み、ノートにまとめること自体が容易なことではなく、それはそれで労力がある課題であることに変わりはないことも見えてきた。しかし、二年間で「100冊」というように作成期間を延長したことで、一年次でノートが完成していなくても、それによって一年次の単位を認定しないという自体は解消されるようになった。但し、作成の期間を延長したとはいえ、一年次の提出後、二年次の提出期限までは、一年半の期間があり、実習も間に挟むため、この間に自主的に「絵本ノート」の作成を進めることを怠った学生は、「100冊」の提出期日の前に慌てふためくことになる。つまり、ノート作成の期間を延長したことで、自らが主体的に課題に取り組む意識と姿勢、提出期限に向かっての自己のペースを守ることの大切さを自覚的に捉える必要が生じ、課題に取り組む時間に対する自覚を促すためのプラスの側面も加えられたと思われる。また、筆者の側も、折に触れて、学生に「絵本ノート」の進捗具合を尋ね、現段階での冊数の目安などを伝えることで、授業内での内職はだいぶ減少したようである。殆どの科目が半期の Semester 制で開講されている短期大学では、授業を担当する期間が二年間を通して継続するわけではないので、「100冊」の絵本を学生に読ませ、ノートの作成を完成させるまでには、教員の側にも様々な声掛けや工夫が必要であることが理解されるようになった。

では、「絵本ノート」には、具体的にどのような事柄を記入させているのか、次にその内容につ

いて記していきたい。

2、「絵本100冊読みノート」の内容

先に述べたように、「絵本ノート」については、筆者は当初から、どのような内容をノートに記入させるのが望ましいのかを十分に理解していたわけではなかった。保育者養成校での経験は七年が過ぎようとしているが、赴任した当初にノートに記入させていたのは、大きくは、「絵本の内容の要旨」と「絵本の感想」の二点であった。評価の力点も、その二点に重点を置いていたことは事実である。だが、保育者を志す学生が、ただ文章を書いているだけでは面白みがないので、取り上げた絵本に関わる「絵」や「イラスト」も、一冊一冊のページには描くように伝えている。絵を描かせることは、筆者が赴任する以前から指示されてきたようであるが、国語教師としての筆者自身が、ノートの「絵」や「イラスト」よりも、文章によって書き記された内容を重視してしまう傾向もあったことは否めない。こうした試行錯誤と紆余曲折した期間を経て、現段階では、学生の作成する「絵本ノート」に記入させている事柄は、以下の十二項目となっている。

①読んだ絵本の冊数の番号。②絵本の題名。③絵本のお話の作者名(作者未詳を含む)、絵を描いた人の名。④絵本の出版社名。初出の出版年月。⑤絵本に出てくる人物やキャラクター。⑥絵本を通じて、子どもに伝えたいこと。⑦絵本の評価を5段階評価で記入。⑧およそ何歳児向けの絵本か。⑨絵本の内容、要旨、特色。⑩絵本の感想。⑪絵本の音読と黙読について。⑫書いた日の日付。

他にも、①～⑫の項目に加えて、例えば、その絵本に「季節感」が現れている場合には、「春夏秋冬」の季節、入園式や卒園式、誕生日会や運動会、クリスマス会などの「行事」に関わる内容が書かれている場合には、それも書き記しておくとも告げてある。A短期大学では、「食育」に関する意識を高めるための取り組みも行っているので、「食」や「排泄」に関する絵本と出会った場合には、「食育」のメモを記すように、とのアドバイスも与えている。とにかく、保育の現場と関わりのある事がら絵本から見出せれば、それも記すように伝えている。

また、途中から「絵本ノート」の選定に偏りがあってはならないことにも気づかされ、選択する絵本にも、幾つかの条件を指示するようになった。第一に、「ノンタン」の絵本など、「シリーズ化」されているものは、その冊数を「四冊以内」にすること。第二に、「日本の昔話」の絵本を、最低でも「八冊以上」は取り上げることを促している。この条件は、「絵本ノート」の完成を急ぐ余りに、安易にシリーズ化された絵本を大量にノートに書き記す学生がいたことが発覚した経験から、着任して数年後に指示するようになったものである。「日本の昔話」の絵本を必ず読むように指示するようになったのも、その条件を与えないと、「日本の昔話」の絵本を全く取り上げない学生がいることに気づかされたためである。授業で説明はするものの、作者未詳の「昔話」とはどのようなものなのか、そのこと自体を知らない学生もいることがわかり、好みに偏らず、なるべく多くのジャンルの絵本を読んでもらうためにも、こうした条件を順次加えることになった。

さらに、「絵本ノート」の一枚一枚のページには、その絵本に関する「絵」や「イラスト」「デザイン」が描かれる。「絵本ノート」の多くには、色鉛筆やクレパス、サインペン、マーカーなどによって、色彩に溢れた学生の「絵」や「イラスト」が掲載されている。絵本の表紙の写真を縮小コピーして貼っ

ている学生やシールを活用する学生もいる。文章で記す内容のみではなく、ノートに記される「絵」や「イラスト」が、それぞれの学生の個性の形を表現しているのは興味深いことである。

そして、時には、学生の側から、教員が気づかないアイデアを提供されることもある。例えば、ノートの裏表紙に、「100冊」の絵本の「目次」を記している学生がいたことがその一つである。この学生は、自らが保育現場に従事するようになった時のために、すぐにノートのページを開くことが出来るように、敢えて「目次」を記したという。このアイデアには感服し、その後は「絵本ノート」に「目次」を記すと後になってから役に立つとのアドバイスも付け加えるようになった。実際に実行している学生もいる。また、当初は、最初の時間に「絵本ノート」の課題の内容を伝え、提出期限を指示するのみであった筆者も、確実にこの課題を学生がこなし、より良いノート作りができるようにと、授業を担当して数年目には授業時間の一コマを割り、「絵本ノート」の作成の実践の時間を設けるようになった。それによって、「絵本ノート」を作成する際の学生の疑問や質問に応じることができ、絵本を読み、ノートを作成するのに掛かる個々人の時間の配分の目安も、自覚的に捉えさせる機会を得られるようになった。

学生が記入する「絵本ノート」の具体的な内容は、以上のようなものであるが、次章では、この課題の目的と意図について、筆者の考えを述べていきたい。

3、「絵本100冊読みノート」の課題の目的と意図

養成校を卒業後に保育者になる学生が、在学中に絵本を「100冊」読むことには、どのような意味があるのだろうか。もちろん、「100冊」という冊数は、できるだけ多くの絵本を読んで欲しいとの願いの表れであり、その冊数に厳密な意味があるわけではない。これまでも、「200冊」「300冊」の絵本を在学中に読み、課題の冊数を超えたノートを提出してきた学生も過去には数名が存在した。しかし、最も大きな理由は、教員が授業内で絵本を紹介し、読み聞かせを学生の前で行ない、学生に読み聞かせの練習の場を与えたとしても、絵本そのものを自らが読むことを繰り返さない限りは、絵本という文化の独自性の奥深さには触れることができないということである。小説には小説の読みのレッスンが必要であり、絵本には絵本の読みのレッスンが必要である。多読をすればよいわけではないが、絵本の世界にも、乳幼児向けの絵本があり、児童向けや大人向けの絵本もある。良い絵本もあれば、良くない絵本もある。これまで余り絵本に触れたことがない学生にとって、まず自らの身を、広漠とした絵本の森の中に投じることによって、その森の中に分け入り、喜びや苦しみ、痛みや不安、良し悪しの判断、充実感や達成感等を経験することで、その森の中から抜け出し、やがては保育者というゴールに到達して欲しいと考えている。

従って、「絵本ノート」の作成を学生に課すことの到達目標を、筆者は、次の三点に大きくは設定している。

第一に、学生自らが「絵本」の文化の広さと奥深さを理解することができるようになること。第二に、保育者として、子どもの発達年齢や状況に応じて、良い絵本を選択できる目を養えるようになること。第三に、お話を要約する力や文章力を向上させること。

これらの三点が、当面の目標であり、「絵本ノート」を作成した二年間の学びの成果として、学生に自覚的に捉えられるようになって欲しい事からである。この目標が叶えられれば、この課題の学習成果の試みは、一先ずは達成されたといつてよい。つまりは、筆者が「絵本ノート」を作成させることの目的と意図には、学生が保育者養成校に入学した当初と比べて、卒業時には、絵本に対

する違和感や不安感が払拭され、専門性を必要とする保育の絵本の領域に対して、知識と見聞を広げることと、絵本に対して自らに自信を持てるようになって欲しいとの期待がある。

先に述べた「絵本ノート」に記入させている①～⑫の項目は、その目的と意図を鑑みて、筆者が用意した項目であり、「絵本ノート」を完成させ、保育の現場に立った後にも、絵本に対する努力の成果を確認し、様々な用途で活用できることを想定したものである。

以下に、先の①～⑫の項目を設定したことについても、その目的と意図を述べておきたい。

①読んだ絵本の冊数の番号／「絵本ノート」を完成させる目標を達成するために、冊数の番号は必要であり、到達度を測るための指針となる。

②絵本の題名／必須の項目。ノートの中の絵本を探す時に見つかりやすいように工夫することも大切である。

③絵本のお話の作者名、絵を描いた人の名。／作者の名前を記録することで、その作者の特色や独自性を把握できるようになる。また、絵本作家や画家、イラストレーターの名前も覚え、絵を描いた人の画風の特色や傾向もつかめるようになる。

④絵本の出版社名。初出の出版年月。／出版社名を記録することで、それぞれの出版社が、どのような絵本作りをめざしているか、どのような工夫を試みているか、どういう傾向の絵本を出版しているのかが理解できるようになる。それによって、安易にキャラクターを売り出すための絵本作りをしている出版社か、乳幼児の発達をふまえた絵本を作ろうとしている出版社かの絵本の選定を行うための判断力も養うことになる。また、初出の出版年月を記録することには、その絵本の価値の持続性を認識して欲しいとの意図がある。保育の現場で、長年に亘って読み継がれてきた絵本には、容易には説明できない場合があるにせよ、子供たちにとっての価値ある要素が内在している筈である。もちろん、新作の絵本にも優れたものや価値のあるものはあるが、二十年三十年と版を重ねている絵本を知ることによって、絵本の価値とは何か、何が子どもたちの興味を掻き立てるのか、を考えるための評価基準をつかみ取って欲しいとの目的がある。なお、②③については、絵本を検索し、探し出すための情報を記録しておくことの意味もある。

⑤絵本に出てくる人物やキャラクター。／絵本に描かれるキャラクターは、人間とは限らない。動物、金魚、おばけ、あおむし、そら豆、ほ乳瓶やマグカップがお喋りをする絵本もある。絵本のお話を読み解く過程で、登場するキャラクターを確認し、その絵本の物語内の枠組みや世界観を捉えるために設定した。

⑥絵本を通じて、子どもに伝えたいこと。／保育の現場では、毎日のように絵本が読まれている。そうだとすれば、今日は何を読もうか、どの本が良いかと、その日に読む絵本を選ぶ際に、絵本を通して子どもに伝えたいことが保育者の中で明確になっていれば、絵本の選定の手助けになると考え、設定した。また、その絵本が何を目的として作られたのかを読み取る力も養って欲しいとの目的から設定した。

⑦絵本の評価を5段階で記入。／どのような絵本が、子どもに読み聞かせをする上で価値があるのか。読み手である学生自身が良いと思った絵本を評価の基準とすることから出発しながらも、幾冊もの絵本を読み進めていく過程で、自らの評価の基準は更新されていく可能性がある。5段階の評価は確かなものではあり得ないが、「絵本ノート」を作成していく二年間の過程で、良い絵本とは何かを考えてもらうことを目的として設定している。

⑧およそ何歳児向けの絵本か。／絵本の選定に際して、保育者に最も必要とされるのが、年齢

や発達段階に即した絵本選びである。今日では、絵本自体に何歳児向けの絵本などの表記が成されているものもあり、そうしたことも参考にしながら、自らの目で、その絵本が凡そ何歳児向けなのかを判断する力を養って欲しいと考えて設定した。

⑨絵本の内容、要旨、特色。／保育の現場で扱う絵本には、乳児向けの赤ちゃん絵本から、五・六歳児向けの絵本まで、様々な絵本がある。お話の内容をまとめておくことで、「絵本ノート」を読み返した時に、その内容がすぐに呼び起こされるようになってもらいたいとの意図がある。同時に、お話の内容や絵本の特色を把握し、それを文章で表現する力も養って欲しいとの意図がある。また、赤ちゃん絵本のように、短い言葉しか記されていない絵本では、絵本の言葉をそのまま書き写しておいてもよく、「絵本ノート」を読むことで、絵本の言葉そのものを読み返すことができると考えた。

⑩絵本の感想。／学生自らが絵本を読むことで感じ取ったこと、考えたことを、文章で表現することで、自己と絵本の世界観との対話を試みてもらうことを目的としている。小説にも同様のことが言えるが、絵本を読むことは自己を読むことであり、自己を読むことが絵本を読むことに反転するメカニズムがある。その読みの過程で、自己の読みの世界観は問い直され、新たな読みの発見へと向うことを意図している。

⑪絵本の音読と黙読。／「絵本ノート」を作成するにあたっては、その内容を理解することに眼目があるため、多くは黙読で済ませても構わない。しかし、実際に子どもの前で絵本の読み聞かせをする際には、当然のことながら、事前に音読をしておき、それぞれのページに記された絵と文章の関係、どのように読めば、その内容やストーリーが子どもたちに伝わり、心に響くものになるのかを考えておく必要がある。また、黙読の時と音読した時では、絵本に対する印象が異なる場合がある。学生には、そうしたことをふまえて、時には声に出して絵本を音読する機会を持つことを勧めている。一度でも音読をしたことがある絵本は、声に出した時の印象が残されることも多く、学生の読み聞かせの練習にもなるので、この項目を設定した。

⑫書いた日の日付／大概のノートにはページの上部に日付を書く欄がある。一年次の四ヶ月間に「60冊」を仕上げるためには、二日で一冊の絵本の記録を書き記すペースが必要になる。もちろん、余り進まない日もあれば、一日に集中して数冊をこなすこともできる。そうしたことを考慮しながらも、自分が何日おきにノートを書いたのか、一日にどれくらい書くことができるのか、そうした目安を確認しながら、「絵本ノート」を作成していくペースを見つけて欲しいとの意図から指示している。また、授業時間内にも、今は「絵本ノート」の作成を始めてから二か月経ったので、「30冊」程度まで進んでいるのが望ましいというように、教員がペース配分に対する声掛けをすることによって、学生の側も自らのペースを確認し、意欲を掻き立てることにもなっていると思われる。

以上が、「絵本ノート」に、①～⑫の項目を設定することの目的と意図、意味付けである。しかし、この目的や意図は、教員である筆者の側が自ら想定し、考えて設定したものであり、必ずしも全てが上手くいっているとは思わない。同時に、課題を要求している筆者の側では、意図していない所での効果を得たものがあることに気づかされることもある。

次には、「絵本ノート」を「100冊」完成させた学生が、この課題の取り組みに対して、どのような感想を抱いたのか、その感想や意見の文章を通して、新たに発見された事らについて考察し、それに対する筆者の見解も述べていくこととする。

4、「絵本100冊読みノート」と学生の意識の変化

筆者が保育者養成校で、「絵本ノート」の課題を学生に課すようになってから、七年が過ぎた。この課題に対する口頭での感想や意見を求めたことは過去にも少なからずあったが、今回は二〇一三年三月の卒業を間近に控え、「絵本ノート」を完成させたばかりのA短期大学の二年生(109名)を対象に、この課題を終えての感想や意見を書き記してもらった。アンケート形式ではなく、自由記述での感想や意見を求めたものであるため、厳密な数値の統計結果を得るための調査ではないが、その分、課題に対する学生の思いの言葉を様々な方向から得ることができたと思われる。今後の保育者養成課程における絵本教育のあり方に対しても、一つの指針を与え参考になる可能性があることに期待して、学生の感想や意見の幾つかを紹介し、筆者なりの見解を述べることで、学生の記した文章との対話を試みてみたい。

まず、学生の全体の感想や意見を通して指摘できることは、ノートの作成に「苦労した」「大変だった」「始めは面倒くさかった」等の言葉は見られたものの、「絵本ノート」の課題そのものに対して、否定的な意見を書き記す学生は一人もいなかったという点である。また、この課題は、一年次・二年次の授業時間内で、ノートに取り掛かるための実践の時間を各一コマずつ充てているが、成績に反映させることを伝えつつ、それ以外には、学生の自主学習の課題として課しているものである。その意味で、この課題に対する否定的な意見が皆無であるのは、学生自らが保育者の仕事に従事することを念頭に置き、将来の仕事に就く上でも、意味のある課題として、「絵本ノート」の作成に取り組むことができていることを示している。

さらに、学生の感想や意見を読み続けていくに従って、「絵本ノート」の作成が、課題として強制的に与えられたものから、主体的かつ積極的な行為へと次第に移行していく様子を窺い知ることができる。課題そのものが、自らにとっての良い機会へと意識の中で捉え直されていく過程が、学生の記した文面からは読み取れる。「絵本ノート」を作成していく中で、学生の意識が変化したことを表現している文章を幾つか書き出してみる。

・(学生1)最初は、ただ単に早く絵本ノートを終わらせたいという気持ちでやっていましたが、実習などを終えてからは、「時期」や「何歳児を対象にした絵本か」などと、絵本を選ぶ際の考え方も変わっていました。

・(学生2)最初の方は、絵がかわいいからこの絵本を書こうと見た目を選んでいただけで、だんだんやっていくうちに、どんな時にどんな絵本を読めば良いのかを考えるようになり、絵本の中身の内容をきちんと見るようになりました。

・(学生3)絵を描くのは苦手で、初めは余り上手く描けませんでした。しかし、一生懸命に描いた絵を友人に見てもらった時に、「上手だね」と言われて、とても嬉しい気持ちになりました。だんだん絵を描く楽しさが分かってきました。

・(学生4)入学した手の頃は、100冊と言われ、無理だと思っていました。しかし、久々に絵本を読んでいき、それぞれの絵本にある、あたたかさや特色を知ることができるようになりました。小さい頃に読んだことのある絵本でも、今、読むと違う見方があり、面白かったです。

・(学生5)最初は、50冊をやるのも、すごく面倒くさかったし、絵を描くのも嫌いだから、やるのがすごく嫌だった。でも、後期になってやり始めたら、前よりも絵が上手くなっている気がして、ノートを書くのが面白くなってきた。

・(学生6)絵本ノートをやってみて、この絵本は伝えたいことがしっかりしているなどか、これは絵は可愛いけれど、余り良くない絵本だなということが、少しずつ分かるようになりました。保育実習では、絵本を自分で用意してきて、読むということが多くありましたが、絵本の選び方が良いねと保育士の方にほめられたのは、絵本ノートのおかげかなと思っています。

・(学生7)書くことが沢山あったし、大変だったと思うこともあったけど、前よりも絵本を読むことが好きになったし、どんな絵本を読んだら子どもが喜ぶのか、少し分かった気がしました。一冊一冊を大切に読んでいこうと改めて思いました。

(学生1)～(学生7)の感想は、自らが絵本を読み進め、ノートを作成していく過程で、課題としてのノートの作成の負担感や不安感が次第に楽しいものや喜びに変わっていき、絵本と子どもの関係を視野におきながら、課題に取り組むようになっていったことが見て取れる。特に、(学生1)の「実習などを終えてからは、『時期』や『何歳児を対象にした絵本か』などと、絵本を選ぶ際の考え方も変わっていました」との言葉や、(学生6)の「保育実習」で「絵本の選び方」に対して「ほめられた」との記述からは、自らが実習での子どもへの読み聞かせの体験を経ることで、絵本を通じて、子どもに何を伝えるべきか、絵の可愛さだけではなく、子どもにとっての良い絵本とは何かを考えるようになったことが明かされている。(学生2)の「どんな時にどんな絵本を読めば良いのか」を考えて、絵本の「内容をきちんと見る」ようになったとの言葉からも、子どもに対する責任感と絵本の重要性を自覚的に捉え直し、保育者になるための意識が育成されていったことが窺える。学生の心の中に、絵本の「あたたかさ」を感じ取り、その「特色」を認識していく意識が生まれ(学生4)、絵本の「一冊一冊を大切に読んでいこう」(学生7)とする自覚が芽生えていることも伝えられている。他にも、絵本の価値を深く捉え直したことを書き記した学生も多い。

また、(学生3)(学生5)のように、自らのノートの絵によって、自己に対する自信を深めていく学生も少なからずいる。ともすれば、保育者を志す学生は、絵を描くことや工作は好きで、歌を歌うことやピアノを弾くことも好んで上達したいと考えていると思う人がいるかもしれない。しかし、保育者志望の学生とはいえ、実際には、図画や工作が不得手な学生も少なからず存在し、短期大学に入学する前には、ピアノの鍵盤には殆ど触れた経験がない学生もいる。

保育者は、多様な知識や技術を必要とされるが、入学時の学生たちの意識の根底にあるのは、個々の科目や分野に対する憧れではない。何よりも、「自分は子どもが好きだ」という気持ちがまず先にあり、そうであっても、子どもとの接し方や導き方、保育の仕事に就くことにも、不安を感じている学生が多いのが現状である。したがって、保育者養成校での教員の側の意識にも、知識や技術を教授することと、保育者としての自信を学生につけさせるためのモチベーションの問題との双方に留意することが必要とされてくる。

この「絵本ノート」の課題に関しても、教員の側で、幾ら絵本をたくさん読むように指示し、保育者には絵本の知識が必要なことや、読み聞かせの技術を各自が高める必要性を力説したとしても、学生の側がそれを子どもとの関わりの中で捉えることができなければ、養成校での教育は意味を成していないことになる。また、教員の側が、学生に向かって絵本の読み聞かせを幾ら行なったとしても、学生一人ひとりが絵本の読み聞かせの技術を向上させるための機会やモチベーションを得ることがなければ、養成校での教育は上手く機能していないということになる。その意味で、次の(学生8)の文章は、先の①～⑫の項目をノートに書き記すことを超え出て、子どもと絵本そのものの総合的な意味を捉えることのモチベーションを、自らがつかみ取ることができた例として示す

ことができよう。

・(学生8)絵を描くセンスとバランス、文章の内容のまとめ方など、細かく言えばいろいろと工夫が必要なことはありましたが、その絵本をどんな時に子どもたちに読んであげたいと思うのかが、ノートを書く上では、とても大切なことだったのかなと思いました。

ある絵本を「どんな時に子どもたちに読んであげたいと思うのか」の大切さを自覚するということは、自分と絵本との関係の中に閉ざされて課題に取り組んでいた段階を乗り越え、子どもと絵本との関係にまで、自らのまなざしが到達し始めていることを意味している。それは、保育者のまなざしを通して、絵本を選定しようとする意識の表われでもあると思われる。他にも、「これから現場に出た時に、絵本のことで悩まされることが少ないと感じるようになった。多くの絵本のことを知っているだけでも、子どもたちとの会話が生まれるきっかけになると思う」(学生9)との感想を記している学生もいる。子どもの目線に立ち、保育者として子どもに関わることの自覚が高まることで、絵本の世界に対する理解も同時に深まっていくものと思われる。「絵本ノート」を通じて、「100冊」の絵本を読み、ノートにまとめるという作業は、単なる課題の域を超えて、幾つかの学習効果を得られることが、学生たちの記した文章からは浮かび上がってくる。

さらに続けて、二年間の「絵本ノート」の作成を通して、学生自身が学び取り、獲得したと自覚されている事柄(大きな力)について、考察していきたい。

5、「絵本100冊読みノート」を通して、獲得された大きな力

先に紹介した(学生1)～(学生9)の文章の内容も含めるが、「絵本ノート」の課題を終えた後に、学生が自ら獲得した事柄について記した内容は、以下の四点に大きくは分類することができる。

(Ⅰ) 文章を要約する力や絵を描く力、持続的に物事に取り組む力が向上したことに喜びを見出し、自己の成長を自覚的に捉えていること。(要約力、表現力、持続力)

(Ⅱ) 絵本をたくさん読むことで、絵本の世界に慣れ親しむことができ、絵本に対する感性が磨かれ、理解や知識が深められたことを認識していること。(感性、理解力)

(Ⅲ) 教育実習や保育所実習等を経験したことで、保育の現場が想定できるようになり、子どもと絵本との関係を視野に入れて、絵本のことを考えることができるようになったこと。(想像力、判断力)

(Ⅳ) 絵本100冊を読破し、一冊のノートにまとめることが達成されたことで、絵本に関する保育者としての自信を獲得し、自らの努力の跡が記された大切な記録として、今後も「絵本ノート」を活用していこうとする意欲が芽生えていること。(達成感、自信、意欲)

もちろん、(Ⅰ)～(Ⅳ)の分類は、厳密なものではなく、筆者がそのように理解した分類に過ぎず、それぞれの内容も相互に浸透し合い、関わり合っている。(Ⅰ)(Ⅳ)の課題を通して得られた自己成長の自覚や自信は、(Ⅱ)の個々の絵本に対する理解を通して得られたものであり、またそれは、保育者を志す学生にとっては、(Ⅲ)の幼稚園や保育所の子どもたちとの関係を視野に入れない限りは、真の意味では獲得され得ないものだからである。(Ⅰ)～(Ⅳ)に関わる学生の文章

を幾つか紹介しながら、それに続けて筆者の見解を述べていくこととする。

(I) 要約力、表現力、持続力の向上

- ・(学生10) 絵が上手になり、文章をまとめることができるようになった。
- ・(学生11) 絵が上手になり、文章をまとめられるようになった。計画的に物事を実行することも学べた。
- ・(学生12) 内容も、その絵本をよく読んで理解した上で書いたので、要約する力が以前よりついたと思います。後回しにすると、自分が困ることにも改めて気付かされました。
- ・(学生13) 絵本ノートをやってよかったと思うことは、文を読み取る能力が増したことです。読み取らなければ、内容も書くことができません。今後の自分のためになったと思うのは、読み取る力、表現する力がついたことだと思います。

筆者の意図していなかったことで、「絵本ノート」を作成する過程で大きな意味があったと学生に捉えられていたことの一つに、「絵が上手」になったことの自覚が上げられる。(学生10)(学生11)に限らずに、絵の上達に関しては、さらに複数の学生が記していたことも指摘しておきたい。このことから、絵を描く機会が保育の現場には多くあり、保育者養成校での教育が個別の授業の中のみで閉じられているのではなく、学生にとっては実は相互に関わりあっていることを、筆者も捉え直すことができたと思われる。ともすれば、保育者養成校の授業のカリキュラムは、複数の専門分野がひしめき合っているため、個々の授業の関連性や学生に対する総合的な目的が、教員の側にも見失われてしまう可能性がある。カリキュラム全体のバランスと学生が背負っている問題を、個々の授業担当者は絶えず認識する必要があると同時に、保育の仕事に対する総合的な理解を得る努力が、教員の側にも必要であることを痛感させられた。そうだとすれば、(学生13)が記している「文章を読み取る力」や「要約する力」もまた、「国語」の問題のみに閉じられているのではなく、保育現場での日誌やお便り、書類の作成等にも関わりあっている。「表現する力」であれば、「表現(保育内容)」の授業との関連性も指摘できる。さらに、(学生11)(学生12)が述べているように、与えられた物事を「後回し」にすると「自分が困る」ことの自覚を得、「計画的に物事を実行する」ことを学べた学生がいたことには、保育者が提出物や準備物を期限までに作成することの意識の問題とも関わり、課題の内容とは別のところでの効果も得られたことが見て取れる。「絵本ノート」の作成が、保育の仕事に必要な、「要約力、表現力、持続力」を向上させることにつながっていくことを切に願いたい。

(II) 感性の研磨と理解力の向上

(学生14) 絵本については何も知らない状態でしたが、いろいろな絵本を読むにつれて、絵本の読み方やお気に入りの絵本ができ、また最初、絵本はひらがなばかりで読みにくさを感じていたけれど、それもだんだんと慣れてきて、実習で読む時も簡単に読めるようになっていて、とても助かりました。

- ・(学生15) 絵本には、さまざまな表現の仕方があることに気付きました。擬音語を繰り返すだけ

の乳幼児向けの絵本や、読んでいてとても感動する絵本もありました。

・(学生16) 読んだ絵本が何年前から読まれているのかを知ることができた。発行回数が多いほど、良い絵本であることが分かった。

・(学生17) いろいろな絵本を読んでいくと、絵やストーリーの書き方を見て、作者と絵を描いた人が分かるようになりました。

・(学生18) 表紙の絵を見て、これはあの絵本と同じ作者であることが分かるようになりました。

・(学生19) この絵本は、どこの出版社だろうかと予想がつけられるようになった。出版社を聞くと、他にもあの絵本を出しているところだなと分かるようになった。絵本に強くなったと感じる。絵を見ただけで、話の内容やどんな絵本だったかを思い出せるようになった。

・(学生20) 季節や活動内容に合った絵本、絵本の内容を見て、年齢にあった絵本選びができるようになりました。

・(学生21) 自分にも絵本の好みがあることが分かり、子どもたちに絵本を読む時には、自分の好みばかりを押しつけないようにしようと思った。

・(学生22) 表紙で絵本を選んでしまいがちですが、自分の好みではないと思った絵本でも、よく読むと中身が濃いものがあり、感動するストーリーの絵本もたくさんあった。

・(学生23) 絵本を通して、自分自身が気づかされることが多くあった。

・(学生24) よくよく考えながら、何度も絵本を読んだり、絵を描いたりするから、絵本が伝えたい事や何のためにこの絵本が作られたのかなど、その絵本についての理解を深めることができた。

・(学生25) 100冊読んでみると、この絵本が何歳向けで、どんな時に読んだらいいのか、またこの絵本は良くないなということが分かるようになった。絵本の良し悪しが分かり、またこの出版社なら良い絵本だろうと分かるようになった。

・(学生26) 友だちの絵本ノートを見て、こんな絵本があるんだと知ることもできた。友だちと、誰々という作者の絵本は凄いやね、などの話や情報交換もするようになった。

(Ⅱ)の学生たちの文章からは、「絵本ノート」の作成を通して、絵本に関する感性が次第に磨かれていったことや、理解力が飛躍的に向上したことを窺い知ることができる。(学生14)が記しているように、一年次の当初は、「絵本については何も知らない」学生も少なくはない。確かに最初は、「ひらがなばかり」で「読みにくさ」を感じ、「擬音語を繰り返すだけの乳幼児向けの絵本」にも目新しさを感じていたと思われる。しかし、多くの絵本を手に取り、読み進めていくに従って、学生たちは、絵本という文化に慣れ親しむことができるようになり、絵本に関する様々な感性と知識を身に付けていったことが分かる。

(学生16～19)の記述からは、絵やストーリーを見て、作者と絵を描いた人が分かるようになったり、出版社の予想がつくようになったり、出版社ごとの絵本の傾向を判断できたり、発行回数に目を留めることができるようになるなど、まさに「絵本に強くなった」と自覚できる力を養っていったことが見て取れる。(学生20～25)には、保育の現場で子どもたちに絵本を読む前提として、最も重要となる筈の「季節」や「活動内容」「年齢」に合わせた絵本の選定ができるようになったこと、自分の好みに偏らない絵本の選定も必要であること、絵本が伝えようとしていることが理解され、絵本の良し悪しの判断がつくようになったことなど、絵本に対する学生の知識や理解力の向上を見ることができる。(学生23)の「絵本を通して、自分自身が気づかされることが多くあった」というように、自己発見を絵本によって促されたことを記している学生もいる。また、(学生26)のように、同

じく保育者をめざす者にとって、絵本のことが話題の一つとなり、「絵本ノート」がその情報交換のための媒体になったことを伝える文章もある。

「100冊」の絵本を読み続け、ノートを作成するということが、筆者の意図を超えて、様々な学習効果を上げ、絵本に関する学生の感性や理解力を育てているとするならば、「絵本ノート」の果たす役割は大きく、この取り組みは一先ずは成功しているということができよう。

(Ⅲ)想像力、判断力の向上

・(学生27)実習で絵本を使う時や指導案を考える際に、ノートを見て、子どもたちに読ませてあげたい内容の絵本を探ることができました。また、内容やイラストや対象年齢を書くので、ノートを見なくても、頭の中から、この絵本がこの課題に合っていることを思い出せるようになりました。

・(学生28)幼稚園実習の時に、絵本を選び、読み聞かせをして、反省会の時には、なぜこの絵本を選んで読んだのかを、幼稚園の先生に詳しく伝えることができました。

・(学生29)実習でも絵本は読んだけれど、この絵本ノートを作成しているから、絵本を使って、子どもに伝えたいことがすぐに出てきた。

・(学生30)「子どもたちに伝えたいこと」を考えることで、絵本から学ぶことが多くあることを改めて知った。

・(学生31)「子どもに伝えたいこと」を考え、その絵本から、何を伝えたいのかを考える習慣がついた。

・(学生32)その絵本を読んで、どのようなことが子どもたちに伝えたいのかもノートに書くので、自分でも、子どもにこういうことが伝えられる、こういうときに読めば良いな、などと考えることができたので良かったです。

・(学生33)自分で読んで、感じ取ったり、考えたりしたので、保育士になった時に、どんな意図で、子どもたちに絵本を読めば良いのかが、分かるようになったと思う。

・(学生34)幼い頃に好きだった絵本が、どのような意味が込められて作られたものだったのか、何を子どもに伝えたいのかが分かってくるようになりました。また、作者によって、絵本の内容の傾向が違って、見て楽しむことを目的としているのか、読んで楽しむことを目的としているのか等、様々な視点で絵本と向き合うことができました。

・(学生35)絵本はただ絵を見るだけではなく、作者の方の思いや伝えたいことが沢山入っているとしました。子どもにとっての絵本の役割は大きいと思います。絵本を通して、感じる心や考えること、言葉や文字など、様々なことを学んでいると思います。季節に合った絵本などをより沢山知っておくことで、子どもたちに多くのことを伝えていけるとと思います。

・(学生36)絵本ノートを書いていくうちに、この絵本はこういう時に読んであげたら、子どもたちが喜びそうだなと想像している自分がいました。そう思うと、保育士になる夢を実現させて、本当に良かったと思うことができました。

(Ⅲ)は、(Ⅱ)の「感性」や「理解力」とも呼応するが、幼稚園での教育実習や保育所実習での体験に触れたものや、子どもに絵本を読む上で、その状況や場に適した絵本を選定する「想像力」や「判断力」が、「絵本ノート」の作成を通して培われたことを記している文章である。

A短期大学では、実際に子どもたちの指導に携わる「幼稚園実習Ⅱ」は二年次の五～六月に

実施され、「保育所実習Ⅰ・Ⅱ」は二年次の九月頃に行われている。一年次に既に「60冊」ほどの絵本を読み、ノートを作成することを課しているため、まだ途上ではあるものの、絵本に対する「感性」や「理解力」は徐々に養われていっていると思われる。実際に子どもたちを目の前にして、絵本の読み聞かせを実践する必要に迫られた時に、保育者は、ただやみ雲に絵本を選び、何でも読めば良いというわけではない。(Ⅱ)で触れたように、「季節」や「活動」、「年齢」を考慮した上で絵本の選定が必要となる。

(学生27～29)が記しているのは、実習で子どもたちに読む絵本を選ぶ際に、「絵本ノート」を作成していることの意味や重要性が分かり、その場の課題や年齢に合わせて、「子どもたちに伝えたい」絵本を選び出すことができたことの報告である。なぜ、その絵本を選ぶのか、学生の中で、明確な理由や説明をすることができるようになっていたのは、「絵本ノート」を作成しているからであるとの確信がもたらされている。(学生30～36)は、実習には触れてはいないものの、絵本を読みながら、「子どもたちに伝えたいこと」を考え、どのような意図や目的でその絵本を読むのか、何を目的として描かれた絵本なのか、見るための絵本か、お話の内容に意味がある絵本かなどに留意し、子どもの立場を「想像」することで、絵本に対する「判断」を行ない、ノートを作成するようになっていくことが見て取れる。

筆者自身は、絵本を通して、「子どもに伝えたいこと」を一文で記すことは、先の理由から指示してはいたが、むしろ、絵本の「内容、要旨、特色」や「感想」を書くことに力点を置いていたことも事実である。「内容」をつかみ取り、「感想」を記していくことで、その絵本に対する学生の理解が深まることを課題の重要部分として考えていたためである。しかし、今回の学生の感想や意見を通して新たに見えてきたことは、学生の意識にあるのは、自らのために絵本を理解したいという欲望ではないということである。おそらく、保育の現場で毎日のように絵本を子どもたちに読む習慣がないならば、学生は絵本に対して、これほどまでに執着し、理解を深めようとする意志や姿勢は持たないであろう。(学生35、36)の文章からも分かるように、保育者を目指す学生にとっては、子どもたちが「感じる心」や「考えること」、子どもにとっての「言葉や文字」が何よりも大切なのであり、絵本を読んであげることで、子どもたちの「喜び」の表情が見たいがために、絵本についても学生はしっかりと学んでいこうとするのである。

A短期大学に限られるのかもしれないが、保育者を志す学生たちは、体を動かすことや歌を歌うこと、遊びのための道具を作るなどの実践系の授業には積極的に関わるが、座学や理論を重視した講義系の授業には消極的になる傾向がある。また、たとえそれが実践系の授業であっても、子どもとの関わりが視野に置かれなかったり、保育者になるための動機付けが得られない形で展開されたりする授業には、学生は不平不満を覚える場合がある。しかし、「保育者になる夢」を実現させることが目標としてあり、その「夢」に直接に対応している事がらならば、学生は熱意を持って取り組むことが可能となる。その意味で、絵本を通して、「子どもに伝えたいこと」を「想像」し、どの場面でその絵本を読めば良いのか、その絵本は子どもにとって良い絵本なのかを「判断」することは、筆者が考えていた以上に、学生にとっては、切実で重要な課題となっていたことが理解される。そうであるならば、筆者自身も認識を改め、授業で紹介する絵本に関しても、保育の場での環境設定や場面設定と、絵本の内容との呼応関係についても、より深く検討していく必要があることに気づかされる。したがって、保育の個々の場面や子どものことを想定しながら、絵本を通じて「子どもに伝えたいこと」を考え、「絵本ノート」を作成していく過程には、子どもと絵本の関係に対する学生の「想像力」と「判断力」を向上させる効果があると思われる。

(Ⅳ)達成感、自信、意欲の獲得

・(学生37)100冊読みノートがなければ、学生生活の中で絵本に触れることは、必要最低限でしかなかったかもしれません。絵本に興味を持て、「この絵が好き」とか「この出版社の本は好きだな」とか、感じるようになったのも、成長だと思えます。

・(学生38)100冊の絵本を読んでみて、まだまだ知らない絵本がたくさんあることを知り、まだ100冊しか読んでいないことが分かりました。でも、ノートを作る前と比べたら、明らかに今の方がいろいろ絵本を読んでいるので、就職してからも、さらにたくさんの本を読んでいきたいです。

・(学生39)100冊を読んで、絵を描いて、感想を書いてとしていると、ノートのページが全部埋まり、出来上がった時に、ものすごい達成感と満足感を感じ取ることができました。

・(学生40)100冊も絵本のことを書くのは、とても大変でした。しかし、100冊も絵本のことを知ることが出来ました。保育士になったら、常に絵本を読む機会があると思います。その時には、この100冊ノートを見て、年齢にあったおすすめの絵本を読んであげたいです。

・(学生41)100冊分のノートを見返した時に、自分は頑張ったなと思うことができました。絵本ノート一枚一枚に思い出があり、学生生活を思い出せる宝物になりました。

・(学生42)絵本100冊読みノートをやって、すごく大変だったし、なかなか進まなかったけれど、100冊目をやり終えた時の嬉しさは、忘れられないです。就職試験でも、絵本100冊というのは、すばらしいし、保育士になったら役に立つと言われました。昔話もしっかり読んで、初めて知った話もたくさんありました。最初は嫌だったけど、頑張ってきたとやって良かったです。

(Ⅳ)は、「絵本ノート」の作成を成し遂げたことに対する学生の「達成感」と、そのことによって得られた「自信」や「意欲」が表明された文章を取り上げている。(Ⅱ)の(学生14)も述べているように、短期大学に入学した時には、絵本に関して、「何も知らない状態」からスタートする学生も多い。その学生たちが、二年後には保育者になり、子どもたちに毎日のように絵本の読み聞かせをしていくことになる。もちろん、「絵本ノート」を作成しなくても、保育者養成校では、絵本に触れる授業や機会はあるだろう。だが、(学生37)にあるように、それでは、絵本に関しては、「必要最低限」のものにしか触れることができないことが予想される。また、「100冊」の絵本を読み、ノートにまとめていく作業は、学生にとっては多くの労力と時間を費やさず、根気と努力が必要とされる課題である。途中で挫けてしまい、単位を得ることだけが目的となり、中途半端でいい加減なノートを提出する学生も中にはいる。

しかし、その困難さを乗り越え、「100冊」の絵本に真摯に向き合い、「ページ」の「全部」が丹念に埋められたノートを完成した学生には、「ものすごい達成感と満足感」(学生39)や至福の喜びが与えられる。そしてまた、その「達成感と満足感」は、保育の仕事に就く上で、大きな「自信」を与えてくれるものになると思われる。短期大学に入学した学生にとって、保育の仕事に携わるまでの準備期間は僅か二年間しかない。二年間で、子どもを育て、援助をするためのすべての技能や人間性を獲得することは、ほぼ不可能である。だからこそ、学生生活では、一つでも多く、自らが「自信」を持てる事柄や分野を育てることが必要になる。

(学生37)は、「100冊」の絵本を読んだことで、自己の「成長」を実感し、(学生38)は、まだそれが氷山の一角に過ぎないことを認識しながらも、「100冊」にたどり着いたことで、さらに多くの絵

本を読んでいこうとする「意欲」が芽生えている。(学生40、41)は、「100冊」の絵本を知り得たことで、自己の努力の成果を「絵本ノート」に見出し、そのノートが保育者になった後の今後の指針となることを告げている。(学生42)は、「就職試験」の際に、「100冊」の絵本を読み、ノートを作成することが、「保育士になったら役に立つ」との言葉を現役の保育士に言及されたことから、自己の努力が報われたことを実感し、大きな喜びを見出していることが分かる。

短期大学を卒業したばかりの保育者は、まだ成人に達して間もない人が多い。子どもとの関わりや対応の仕方、生活習慣、報告書の作成、保護者の対応、園の中での人間関係、ピアノの技能、遊びの道具の作成など、就職先が決まった後にも、多くの学生が不安を抱えているのが現状である。その中で、「100冊」の絵本を読み、ノートを作成することには、絵本に対する理解が深められること以上に、学生が保育者として巣立っていくための、内的な成長の問題が大きく関与していると思われる。「100冊」の絵本を読み、項目が埋め尽くされた「絵本ノート」は、自らに「達成感」をもたらし、それが保育者になることへの「自信」にもつながっていく。さらには、保育者になった後にもノートを見直すことで、絵本を読み続けていくことへの「意欲」が生まれていくというように、である。

「絵本ノート」の果たす役割は大きく、分野の問題に留まらず、保育者として学生が自立していくための精神的な一つの架け橋となる可能性があると考えられる。

6、まとめと今後の課題

以上の考察から、保育者養成校での「絵本100冊読みノート」の作成の課題を通しては、(Ⅰ)～(Ⅳ)の大きな力が学生に獲得されることが確認された。改めて記しておきたい。

(Ⅰ)要約力、表現力、持続力／(Ⅱ)感性、理解力／(Ⅲ)想像力、判断力／(Ⅳ)達成感、自信、意欲。

短期大学の二年間で、「100冊」の絵本を読み、ノートをまとめるという作業は、学生には大きな負担を強いられ、着実に一步一步を進めていくペースの確保が必要となる。しかし、保育者という職業に就くことを目前のこととして自覚し、子どもたちに少しでも良い保育や教育を施すことをめざしている学生にとっては、その負担は自らの努力によって克服されるものであったことが見て取れる。また、「絵本ノート」の作成は、絵本に対する理解や感性の深まりに留まらず、文章を要約する力や絵を描く表現力をも、同時に向上させ得る可能性があることが明らかになった。また、持続的に課題に取り組むことができ、「100冊」の完成の頂上にたどり着いた「絵本ノート」は、自らの成長を実感できる貴重な資料になることも確認された。自らの成し遂げた努力の成果が、保育者になるための大きな自信につながり、就職後の仕事に対する意欲を促す原動力になることが、学生の記した文章からは浮かび上がってくる。その意味で、保育者になる学生にとって、「絵本ノート」の果たす役割は大きいといえよう。

そうはいつでも、「絵本ノート」の課題は、学生が主体的に取り組むことが前提とされるため、途中で保育者になることを断念し、進路を変更した学生にとっては、負担感が過大ものになる危うさもある。また、保育者になるモチベーションに欠け、計画性がなく、物事に持続的に取り組むことができない学生にとっては、「絵本ノート」は、単に提出期日の直前に急き立てられて、表面的に

形のみを整えるだけの余り意味のない課題になってしまう弊害もある。したがって、こうした自主的な課題の取り組みが成功するためには、学習者のモチベーションや資質がその課題と合致していることが一旦は前提となる。つまりは、「絵本ノート」の作成は、保育者を志す学生が大半を占める保育者養成校だからこそ、比較的成立しやすい課題であるとも考えられる。

しかし、さらに広い視野に立って見た場合には、こうした課題の取り組みが、文学教育や古典の学習、あるいは国語の教員養成課程や文学講座等においても、導入できる側面があるのではないかと期待も筆者は抱いている。多くの本を読み、内容や物語に対する感性与理解を深めながら、自らの読みの結果を「ノート」にまとめていく行為は、与えられた課題であるにも関わらず、主体的な意識と姿勢が必要とされる行為でもある。読むことに留まらず、一つひとつの物語や小説に対して、視覚的な工夫を加えながら、「ノート」を作成していく作業の過程には、幾度の苦難や喜びが与えられる筈である。読み手の主体を問い直すための契機が孕まれていることも予想される。項目の設定内容に関しては今後の検討が必要となるが、冊数や期限を設けることで、自己の時間やペースに対する認識が深められる可能性もある。従来 of 読書ノートのあり方を相対化し、新たな成果を生むための「ノート」を課題とする試みは、保育者を志す学生に限らず、もっと広い層の読み手を対象として試みられても良いと思われる。

加えて、別の観点から見た場合には、物語と小説の違いを峻別し、物語の読解を経て、小説の世界観を読むことに価値を見出している筆者にとって、人間がその発達段階や成長過程に応じて、物語や小説と向き合うことの意味を捉えたいとの思いがある(拙稿「小説と絵本を読むための一考察」、『山陽学園短期大学紀要・第41巻』2012年12月 等を参照)。確かに、保育者を目指す学生は、自己の目標や目的が明確になっているからこそ、「100冊の絵本」を読み、ノートを完成させたことで、「達成感」や保育者になる上での「自信」や「意欲」を獲得することができたといえるだろう。先に述べたように、自主的な課題の成功には、学習者のモチベーションや資質が、その課題と合致していることが課題に取り組む際の前提となる筈だと考えることに変わりはない。

しかし、その一方で、「100冊」もの絵本を読み、ノートを書くという過程には、もう一つの別の要素が読み手に介在しているようにも思われてならない。それが、(学生23)が記していた「絵本を通して、自分自身が気づかされることが多くあった」との文章であり、(学生22)等の絵本を通して「感動する」体験を得たことを伝える文章が示唆している問題である。現段階では、今後の課題として考察すべき問題の域は出てはいないが、学生は「100冊」を読み終えたと同時に、「100通り」の絵本の内容や物語を読んできたことになる。そこには、当然、言葉があり、お話のストーリーが流れ、読み手の心が揺さぶられるような、読みの体験もあっただろうことが窺い知れる。そうであるならば、単に「100冊」を読み終えたことだけが、学生に「達成感」や「満足感」、「自信」や「意欲」を与えているのではないことも予測される。つまりは、「100冊」の中の幾冊かの優れた絵本が、逆に学生の心を揺さぶり、生きることの意味を考えさせ、仕事をするることの意味や、人と関わることの問題に対する認識を深めさせていったともいえよう。絵本に内在する力が、読み手の内部に自己倒壊を起こさせ、自己の世界観に対する認識を深めさせていったことも考えられるのである。そうであるならば、学生の内面に「達成感」や保育者としての「自信」や「意欲」が芽生えたことの要因には、「100冊」の「絵本ノート」を作成したことのみではなく、絵本そのものに内在する力が学生の意識を鼓舞し、新たな認識の世界へと導いていったことが想定される。そのことを解明していくためには、学生が感動した絵本に対する読みの分析が必要となる。今後の課題としたい。

また、「絵本ノート」の課題に関する調査と研究には、筆者の前任者等が、卒業生を対象として、

二〇〇三年にアンケート調査を実施した結果をもとに考察した論文(村中由紀子・三浦正雄・諏訪英広「保育士養成課程における『絵本100冊読み』実践の成果と課題—A 短期大学幼児教育学科卒業生に対する質問紙調査をもとにして—」(「山陽学園短期大学紀要・36巻」2005年12月)があり、卒業生と卒業生が在職する保育園・幼稚園の主任保育者に対して、二〇〇四年にも絵本の選定や素話に関するアンケートの調査が行われ、その調査の結果をもとに、前年度の研究を引き継ぐ形で、筆者等が分析と考察を行った論文(鈴木正和・村中由紀子・三浦正雄・峰村康広「絵本の読み聞かせと素話についての調査と展望—a短期大学幼児教育学科卒業生に対する質問紙調査をもとにして・2—」(「山陽学園短期大学紀要・37巻」2006年12月)がある。

今回の論考は、それらの成果に基づきながら、筆者自らが担当して七年後に、改めて「絵本ノート」の取り組みの成果を考察するために論じたものである。「109名」の学生のうち、「42名」の文章のみを例として上げたが、その他にも内容的には重複する文章が多く、主たる感想や意見を取り上げることで、考察を加える運びとなった。本研究が、今後の保育者養成校における絵本教育と研究、文学教育等の参考になるところが少しでもあることに期待したい。